

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284011

研究課題名(和文)ポスト・セキュラー状況における宗教研究

研究課題名(英文)Comparative and Critical Research on the Post-Secular Situation of Japan

研究代表者

鶴岡 賀雄 (TSURUOKA, YOSHIO)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：60180056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：「無宗教」を自認する者が多い現代日本で、公共の場に進出する宗教の報道が増えていく。被災地支援活動を行う宗教者や、政権の支持基盤とされる右翼的宗教団体に関するものが目立つ。こうした現象は、欧米では「ポスト・セキュラー」と総称される。その意味するところは、一つは、世俗化が終焉し、その逆転が起きているということ。もう一つは、近代的な宗教/世俗の二分法を相対化した上での“宗教”研究を構築する試みが必要とされていることである。このポスト・セキュラー論は日本にはどの程度あてはまるのかを、事例研究と理論的考察を組み合わせ分析したのが本共同研究である。結論はメンバー間で異なるが、成果を和英両方で出版した。

研究成果の概要(英文)：Although many Japanese people identify themselves as non-religious, the media have increasingly been reporting the power of religion in the public sphere of Japan, most notably regarding post-disaster religious aid and what some consider as the resurgence of state Shinto. Similar examples in other countries have been called “public religion” or “post-secular” phenomena by western scholars. Has Japan also entered a post-secular stage? How can scholars of religion meaningfully answer such a question if they admit that the dichotomy of religious/secular is a modern Western construct and have to be critical of the very basic concept of religion? This project attempted to tackle this question, that is, whether we can say that Japanese people and society have become more religious or less religious, or neither, and what “religious” indicates in such statements, by means of evidence-based empirical researches and theoretical reflections. A part of our conclusions is available in English.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教学 世俗 宗教 世俗化 公共 政治 国際情報交換 多国籍

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景として、宗教学にも、人類学・社会学等の隣接諸学にも通底する、2つの潮流を挙げることができる。

第一は、「宗教概念批判」や「ポスト・コロニアル批評」の名で呼ばれてきた諸研究の流れである。宗教学の諸概念・諸理論に西洋近代的バイアスがあるとの指摘やその克服の試み自体は新しいものではない。本研究グループの連携研究者である島園進は、ウェバーの近代化理論によって日本の宗教現象を分析することの限界を1970年代から問題化してきた。1990年代からの研究の進展として、宗教学の最も中核となる「宗教」概念自体の歴史的被拘束性(プロテスタント的・近代リベラリズム的性格)について詳細な歴史的研究が蓄積されたこと(Hans Kippenberg, *Religionswissenschaft und Moderne*, 1997(邦訳2005); Ernst Feil, *On the Concept of Religion*, 2000; Michel Despland, *La Religion dans l'histoire: Le mot, l'idée, la réalité*, 1992; 島園・鶴岡編『宗教再考』2003、等)および植民地・ポスト植民地状況下の宗教学の政治性に対する批判が沸き起こったこと(Talal Asad, *Formations of the Secular*, 2003(邦訳2006); David Chidester, *Savage Systems*, 1996(同2010); Richard King, *Orientalism and Religion*, 1999; etc.)が重要である。それは主として、西洋的宗教概念の普遍性を前提とし、世界諸地域・民族・階級・ジェンダー等の差異を覆い隠してしまう帝国主義的な知のあり方に対する反省だった。

第二に、「宗教の社会的役割」「公共圏と宗教の関係」に関する、1990年代から徐々に台頭し、21世紀に入りさらに脚光を浴びている諸研究がある。これは、第一の研究群とは異なり、(宗教理論や概念ではなく)現代社会の宗教現象自体を対象とする。ホセ・カサノヴァによる「公共宗教」論の問題提起(*Public Religions in the Modern World*, 1994(邦訳1997))は、社会学・社会思想の領域ではハーバース、チャールズ・テイラー、ウルリヒ・ベック等の「公共圏における宗教の意義」論として発展し、宗教学では社会関係資本としての宗教の意義を再認識する、実証的かつ実践的研究(社会貢献仏教[engaged Buddhism]の研究が知られているが、東日本大震災後は対象宗教も研究ネットワークも急速に拡大している)さらには死生学(特にコミュニティ・国家レベルでの追悼儀礼等)宗教間対話研究、等において展開している。これらの研究が対象とする状況に対して、近年「ポスト・セキユラー」の語があてられることが多い。これは単に、世俗化の時代の後に宗教復興の時代が到来した、という意味ではない。これまでリベラルで寛容だとみなされてきた世俗的な国民国家が、実は宗教的に価値中立的ではなく、宗教全体ないし特定宗教に対して抑圧的だったので

はないかという問題提起が含まれているのである。

上記の二大潮流は、一言では「『宗教』概念後の“宗教”研究」とまとめることができる。前者は、西洋近代的な普遍的「宗教」概念の原理的再考を経た後の新しい宗教学であり、後者は、西洋近代的な宗教/世俗二分法を相対化する、新たな“宗教”的現象を対象とする研究だからである。ところが、事柄自体としては連続しているはずのこの二つの潮流は、出発点を異にしたこともあって、双方を有機的に関連づけ、総合する研究は、国内でも国外でも不足しているように見える。例えば、第二の「宗教の社会的役割」「公共圏と宗教の関係」の諸研究では、既成宗教団体(すなわち、キリスト教、仏教、イスラーム、新宗教等)が研究対象の単位となることが多いが、第一の「宗教概念批判」研究群から見れば、従来の「宗教」概念にとらわれて、視野が狭められている可能性がある。また、「『宗教』概念後の“宗教”的現象」は、しばしば「スピリチュアリティ」(ニューエイジ文化等)と同一視されてきた。しかし、この「伝統宗教/スピリチュアル」という区分は、近世初期以来の「教会/神秘主義」(トレルチ)という西欧的宗教観を事実上引き継ぐものとも言える。「宗教概念批判」はこの区分自体を揺るがすものだったはずである。もう一例挙げれば、「フェティシズム」というレッテルを貼られてきた、物体への即物的アタッチメントを中心とする現象は、「宗教」としては最も価値のないものとされ、ほとんど研究の関心を引いてこなかった。「アニミズム」や「シャーマニズム」は、スピリチュアリティの一形態として評価される傾向がある。)だが、「『宗教』概念後の“宗教”的現象」を対象とする場合は、そのような位相の探究も重要なものとなる。

さらに、第二の研究群では、公共生活に資する宗教の側面が宗教の本質であり存在意義であるかのように語られることがある。これはポスト・セキユラー状況の中で「宗教」を捉えなおすというよりも、世俗社会の公益性の範囲内に宗教を回収する試みにも通じうる。そうした理解では見失われるものをすくい上げることが、「『宗教』概念後の“宗教”的現象」の研究としては求められる。そのためには、第一の研究群との接合が欠かせない。

2. 研究の目的

1において背景を説明したように、現在、宗教学全体を巻き込む根本的な問題として2つの課題が内外の学界において認識されている。第一に、「宗教」概念を始めとする宗教学の諸概念・理論が帯びていた西洋近代的特殊性、さらに宗教学という学的営為の政治性に対する自己反省を経て、宗教学をどう再建するかという課題がある。第二に、21世紀に入る頃から「公共圏における宗教の役

割」が盛んに論じられ始めたように、近代的な「宗教」と「世俗」の分割線がグローバル社会において揺らぎ、ポスト・セキュラーと呼ばれる状況が新たに出現しているが、これをどう捉えるかという課題である。本研究の目的は2つの課題を有機的に接合することである。

3. 研究の方法

目的に照らして戦略的に領域を定め、研究分担者・連携研究者から成る次の4グループに分かれて研究を遂行した。

第1 = 「政治・法と宗教」グループ

このグループは、ポスト・セキュラー状況における政教関係を理論的・実証的に研究した。

西村 明 日本の慰霊・追悼を主な事例とした調査研究

市川 裕 イスラエルの政教関係との日本の比較

伊達聖伸 フランスのライシテ状況・論争との日本の比較

久保田浩 ドイツの公共宗教論との日本の比較

富澤かな インドのセキュラリズム論と日本の比較

第2 = 「医療・福祉と宗教」グループ

このグループは、従来の死生学や「宗教の社会貢献活動」研究に、宗教概念批判を反映させ、ポスト・セキュラー状況のなかにこれらを再定位するための理論的・実証的研究を行った。

池澤 優 日本の医療の現場や生命倫理問題を事例とした調査研究

高橋 原 宗教者による震災被災者の心のケアを事例とした調査研究

島蘭 進 グリーフケアと震災後の宗教の社会貢献活動を事例とした調査研究

矢野秀武 宗教の社会貢献活動に関するタイと日本の比較

古澤有峰 欧米のグリーフケア・スピリチュアルケアと日本の比較

第3 = 「宗教意識の新動向」グループ

このグループは、伝統的宗教の復興や、従来の意味でのスピリチュアル文化（新霊性文化）の単なる存続とは異なる形で、宗教的なものが新たに発生しているのかどうかについて、理論的・実証的研究を行った。具体的には、1990年代以降の流行文化や地域コミュニティに見られる宗教性を従来の概念枠組みから離れて探究する、世代交代の進む教団内の宗教意識の変化を調査する、東日本大震災前後の日本人の宗教意識に関する調査を批判的に検討する、等の課題に取り組んだ。

堀江宗正 若者の宗教意識、震災前後の変化を事例とした調査研究

石井研士 大都市地域コミュニティにおける新しい宗教性の調査研

究

葛西賢太 教団内の世代交代・高齢化を事例とした調査研究

井上まどか ロシアの宗教復興状況との日本の比較

松村一男 現代の神話的物語群に関する欧米と日本の比較

奥山倫明 現代の小説や映画の宗教性に関する欧米と日本の比較

第4 = 「統括」グループ

このグループは、本研究全体の理論的枠組みおよび先行研究の整理作業に責任を持つほか、他の3グループの研究を相互に関連づけ、総合的に分析した。また、本研究を、大学院生レベルの将来世代の研究者教育に結びつける役目も負った。

鶴岡賀雄 研究の統括、日本および欧米の宗教間対話の新動向とその理論化

藤原聖子 研究の統括、ポスト・コロニアル論からポスト・セキュラー論への転換の意義とそのコンテクストを分析

江川純一 本研究の学生・院生教育へのアウトプット、フィードバックのシステム化

深澤英隆 ポスト・セキュラーと分類される宗教哲学・神学の新動向に対する批判的検討

住家正芳 世俗化論後の宗教社会学と進化論的宗教学の思想的側面に対する分析

4. 研究成果

平成26年度はまず、上記の目的に沿って先行研究を整理した。続いて研究グループごとに具体的研究テーマを設定し、実地調査、文献調査等、それぞれの研究手法に応じた研究を開始した。「政治・法と宗教」グループは、政教分離体制下の戦後日本において、政治に対し宗教が実際には何らかの関わりを持ってきたことを、政党、政治家、政治儀礼の三点について解明した。現代社会の王権と宗教の関係に関する国際的比較研究にも着手した。「医療・福祉と宗教」グループは、東日本大震災後の東北地方におけるスピリチュアル・ケアの実践について、供給者と受給者の両面から調査した。また、イギリス・ダーラム大学の死生学センターとの研究交流を深めた。「宗教意識の新動向」グループは、東日本大震災後の霊信仰に注目する他、ポピュラー文化の宗教性をどのように分析するか、理論的・方法論的検討を行った。）

平成27年度は、研究グループごとに研究成果をまとめ、英語による海外発信を活発に行った。まず、8月にドイツ・エアフルト市で開催された国際宗教学宗教史学会世界大会でパネル発表を行った。さらに、それぞれが発表原稿を論文に発展させ、 Brill 社から刊行されている日本宗教研究専門の国際的学術誌 *Journal of Religion in Japan* に全論文を寄稿すべく、相互批評により改稿を重ねた。11月にはアメリカ宗教学会で発表したメンバーもいる。これらの発表・論文に共通する問題提起は、日本の現在の宗教情勢を、

ポスト・セキュラー的と分類することは妥当か、あるいは、世俗化の継続・反証のどちらと見るべきかというものである。その問いに対する直接的な答えはメンバーにより異なるものになったが、いずれも経験的データ、事例により堅実な論証を図った。

以上に加え、12月からは、日本語による論文集の企画を始めた。

平成28年度は、8月にドイツ・エアフルト市で開催された国際宗教学宗教史学会世界大会で行った発表に基づく諸論文を、日本宗教研究専門の国際的学術誌 *Journal of Religion in Japan* に発表した(特集のテーマは“Secularity and Post-Secularity in Japan: Japanese Scholars' Responses”)。

続いて、日本語による、より総合的な研究成果の発信のために論文集の出版計画を進め、内容の検討のために編集委員会・全員での検討会を計5回開催した。

平成29年度は、グループの研究成果の相互吟味・総合を集中して行い、総合的な研究成果の発信として論文集の出版を計画し、それぞれ執筆した(平成30年度中に刊行予定)。4巻構成で、第1巻の編集担当は分担者のうち堀江、第2巻は西村、第3巻は藤原、第4巻は池澤が担当した。

各巻の内容は、第1巻「現代日本の宗教事情」(序論「変わり続ける宗教/無宗教」、1部「岐路に立つ伝統宗教」、2部「新宗教の現在」、3部「現代人のスピリチュアリティ」、4部「在留外国人と宗教」)、第2巻「隠される宗教、顕れる宗教」(序論「(ポスト)世俗化論と日本社会」、1部「「政教分離」のポリテイクス」、2部「宗教の「公益性」をめぐる」、3部「見えない宗教、見せる宗教」)、第3巻「世俗化後のグローバル宗教事情」(序論「20世紀から21世紀への流れ」、1部「伝統的宗教の復興/変容」、2部「新宗教運動・スピリチュアリティの現在」、3部「グローバル化とダイバーシティ」)、第4巻「政治化する宗教、宗教化する政治」(序論「公共圏と宗教のせめぎあい」、1部「ナショナリズムと宗教」、2部「世俗・人権・宗教」、3部「宗教の公共化」)となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計75件)

高橋原、「声にならない声を聴く 死者の記憶に向き合う宗教者」, 磯前順一編『<死者/生者>論 傾聴・鎮魂・翻訳』ペリカン社、査読なし、1、2018年、45-70頁

石井研土、「魔法と変身 - 「魔法少女」形成期における「魔法」」, 『國學院大學紀要』, 査読あり、56、2018年、29-55頁

矢野秀武、「上座仏教圏における宗教と国家 - 宗教関連制度に関する基礎情報 - 」, 『文化』, 査読あり、36、2018年、(1)-(26)頁

鶴岡賀雄、「序章 「生きる意味への問いかけ」がなされる場をめぐる」, 清水正之・鶴岡賀雄・桑原直己・釘宮明美編『生きる意味 - キリスト教への問いかけ』オリエンズ宗教研究所、査読なし、1、2018年、7-15頁

Satoko Fujiwara, “This Is not a Religion!: ‘The Treachery of the Images’ of Aum, Yasukuni and Al-Qaeda in Japanese Textbooks”, ed. by Bengt-Ove Andreassen, James R. Lewis and Suzanne Anett Thobro, *Textbook Violence*, Sheffield: Equinox, 査読なし、1、2017年、27-52頁

伊達聖伸、「アブデヌール・ビダールにおけるライシテとイスラーム」, 『フランス哲学・思想研究』, 査読なし、22、2017年、42-53頁

伊達聖伸、「フランス、ベルギー、ケベックのライシテを比較する 成り立ちと現在の課題から」, 『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』, 査読なし、21(別冊)、2017年、63-83頁

深澤英隆、「哲学的宗教言説の帰趨」, 『哲学』, 査読なし、68、2017年、69-84頁

Akira Nishimura, Are Public Commemorations in Contemporary Japan Post-secular?, *Journal of Religion In Japan*, 査読あり、5、2016年、136-152頁

Norichika Horie, Continuing Bonds in the Tohoku Disaster Area, *Journal of Religion In Japan*, 査読あり、5、2016年、199-226頁

Hara Takahashi, The Ghosts of Tsunami Dead and Kokoro no kea in Japan's Religious Landscape, *Journal of Religion In Japan*, 査読あり、5、2016年、176-198頁

Kiyonobu Date, “Religious Revival” in the Political World in Contemporary Japan with Special Reference to Religious Groups and Political Parties, *Journal of Religion In Japan*, 査読あり、5、2016年、111-135頁

Masayoshi Sumika, Behind the Mask of the Secular, *Journal of Religion In Japan*, 査読あり、5、2016年、153-175頁

鶴岡賀雄、「「スピリチュアリティ」と「神秘主義」 カトリック圏での用法を中心に」, 鎌田東二企画/編『講座スピリチュアル学 第7巻 スピリチュアリティと宗教』, 査読なし、1、2016年、67-91頁

IKEZAWA, Masaru, "Rapport du congres international 《Apres le desastre - commemoratives et culturelles》”, *Death & Life Studies and Practical Ethics*, 査読なし、1、2016年、5-13頁

Satoko Fujiwara, Why the Concept of ‘World Religion’ Has Survived in Japan:

On the Japanese Reception of Max Weber's Comparative Religion, Contemporary Views on Comparative Religion, ed. by Peter Antes, Armin W. Geertz and Mikael Rothstein, 査読なし、1、2016年、191-203頁

Satoko Fujiwara, How Religious Studies is Taught in Japan (In Other Classrooms), Teaching Theology and Religion, 査読あり、18/3、2015年、276-279頁、DOI: 10.1111/teth.12295

西村明、「船と戦争 記憶の洋上モデルのために」、『思想』、査読なし、1096、2015年、51-66頁

伊達聖伸、「イスラームはいつ、いかにしてフランスの宗教になったのか」、『宗教研究』、査読あり、383、2015年、107-132頁

西村明、「葬送儀礼への第三者の関与 参入と介入の視点から」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、査読あり、191、2015年、299-314頁

〔学会発表〕(計51件)

Kana Tomizawa, "Follies, Mosques, and Majolica Tiles: Imagining the Colonial Built Environment in the Indian Ocean", Association for Asian Studies (国際学会), 2018年

Satoko Fujiwara, "How Religion Is Taught Differently in Different Countries", World Humanities Conference (国際学会), 2017年

DATE Kiyonobu, "Pourquoi etudier la laicite au Quebec ? Le regard d'un chercheur japonais", Symposium Etudier la religion au Quebec : Regard d'ici et d'ailleurs (招待講演)(国際学会), 2017年

YANO Hidetake, "Religious Studies in Japan", 1st Seminar on Religious Studies in the College of Religious Studies Mahidol University(招待講演)(国際学会), 2017年

Norichika Horie, The Making of Power Spots: From New Age Spirituality to Shinto Spirituality, Association of Asian Studies (国際学会), 2017年

Satoko Fujiwara, "Islamicized Buddhism" in RE textbooks in England: How the Call for Community Cohesion Has Affected RE, American Academy of Religion (国際学会), 2016年

堀江宗正・島蘭進, Suicide Prevention in Japan: Does religion help to prevent suicide?, 第7回国際自殺予防学会アジア・太平洋地域大会(国際学会), 2016年

Hidetake Yano, The Religious Nature of the King in Modern Thailand, (A paper presented in the session "Kingship and Religion in

'Post-Secular' Society"), XXI World Congress of the International Association for the History of Religions (国際学会), 2015年

Michiaki Okuyama, Religious Dimensions of the Japanese Imperial System in a Post-Secular Society, XXI World Congress of the International Association for the History of Religions (国際学会), 2015年
Hidetaka Fukasawa, Georg Simmel and the Paradoxes of the "Intellektuellenreligion", XXI World Congress of the International Association for the History of Religions (国際学会), 2015年

市川裕、「公的宗教としてのユダヤ教とその現代の変容」、『韓国宗教学会』、2014年

Akira Nishimura, Mapping Minamata on Kyushu island on the geopolitical perspective and the tracing-layer movements, International Union of Anthropological and Ethnological Science, 2014年

〔図書〕(計15件)

伊達聖伸、岩波書店、『ライシテからよむ現代フランス 政治と宗教のいま』、2018年、iv+243

奥山倫明、晃洋書房、『制度としての宗教 近代日本の模索』、2018年、290頁

江川純一、久保田浩、鶴岡賀雄、山崎亮、渡辺和子、高井啓介、山本伸一、青木健、毛利晶、野口孝之、寺戸淳子、佐藤清子、井上まどか、西村明、リトン、『「呪術」の呪縛【下】』、2017年、414頁

松村一男、平藤喜久子編、『神のかたち図鑑』、2016年、484頁

島蘭進、NHK出版、『いのちを“つくって”もいいですか? 生命科学のジレンマを考える哲学講義』、2016年、238頁

日暮雅夫、尾場瀬一郎、市井吉興、百木漠、江口友朗、栗谷佳司、住家正芳、ナンシー・フレイザー、ミネルヴァ書房、『現代社会理論の変貌: せめぎ合う公共圏』、2016年、196頁

宇野重規、伊達聖伸、高山裕二編、白水社、共和国か宗教か、それとも 十九世紀フランスの光と闇、2015年、300頁

江川純一、久保田浩、藤原聖子、竹沢尚一郎、横田理博、高橋原、谷内悠、鈴木正崇、木村敏明、池澤優、川瀬貴也、井関大介、一柳廣孝、宮坂清、今井信治、堀江宗正、リトン、『「呪術」の呪縛【上】』、2015年、470頁

井上まどか、井上順孝、杉内寛幸、高橋シズエ、高橋典史、塚田穂高、平野直子、藤田庄市、藤野陽平、矢野秀武、春秋社、『<オウム真理教>を検証する そのウチとソトの境界線』、2015年、350頁

池澤優、羊土社、『現代生命科学』、2015年、189頁

市川裕、河出書房新社（フクロウの本シリーズ）『ユダヤ教の歴史』、2015年、131頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鶴岡 賀雄 (TSURUOKA, Yoshio)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：60180056

(2) 研究分担者

市川 裕 (ICHIKAWA, Hiroshi)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20223084

池澤 優 (IKEZAWA, Masaru)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：90250993

藤原 聖子 (FUJIWARA, Satoko)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：10338593

西村 明 (NISHIMURA, Akira)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：00381145

堀江 宗正 (HORIE, Norichika)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：90338575

江川 純一 (EGAWA, Junichi)
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：40636693

高橋 原 (TAKAHASHI, Hara)
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：30451777

伊達 聖伸 (DATE, Kiyonobu)
上智大学・外国語学部・准教授
研究者番号：90550004

石井 研士 (ISHII, Kenji)
國學院大學・神道文化学部・教授
研究者番号：90176131

(3) 連携研究者

久保田 浩 (KUBOTA, Hiroshi)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：60434205

矢野 秀武 (YANO, Hidetake)
駒澤大学・総合教育研究部・教授

研究者番号：20422347

富澤 かな (TOMIZAWA, Kana)
東京大学・附属図書館 U-PARL・特任准教授
研究者番号：80503862

井上 まどか (INOUE, Madoka)
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号：70468619

松村 一男 (MATSUMURA, Kazuo)
和光大学・表現学部・教授
研究者番号：70183952

奥山 倫明 (OKUYAMA, Michiaki)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：30308928

深澤 英隆 (FUKASAWA, Hidetaka)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：30208912

住家 正芳 (SUMIKA, Masayoshi)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：60384004

島園 進 (SHIMAZONO, Susumu)
上智大学・神学部・教授
研究者番号：20143620

葛西賢太 (KASAI, Kenta)
宗教情報センター・研究員
研究者番号：00281014